

かきの木幼稚園 12月園だより



令和7. 11. 21 No.1
かきの木幼稚園
園長 川井 直子

えんちょうのふでばこ

この「形骸」なるもの

・ 幼児期の教育・幼稚園
「COP30 国際会議」

「子どもまんなか社会」と言うスローガンが世の中に宣言されてから記憶に新しい。子どもの利益に最善を尽くす「子どもまんなか」とは何か？教育の立場から主張すると、金銭では推し量れない永続的で、深い何かがあると信じていた。例えば、様々な困難や苦しみがあったとしても、その先に大きな喜びをもたらすものがあると…。しかしながら国の予算は、「幼稚園」には少なく、「就労支援施設」に傾いている。それは、とりもなおさず「日本経済まんなか」ではないのか？若い頃、エリックソン著「人間の生涯発達試論」を読み「人間」は幼児期から児童期、「老い」を迎えるまで生きて行く途上での「危機」と「受容」をくり返し、「生長」があるとの説に痛く感銘した。

世界各国の幼児教育の背景には、その国の文化や歴史に根ざしたものである。日本も同様である。長い間幼稚園教育に関わって来た園長としては、苦悩しながら現代社会の若者の生き方に学ぶのみである。

・そして、「COP30 国際会議」

身近な例として、「地球温暖化」がもたらした影響で山々の広葉樹のブナやくぬぎの実が凶作になってしまった。そのため、冬ごもりの準備でクマの親子が里山までも出没して餌をあさる。その場に遭遇され命を落とされた方もあり、誠にお気の毒である。しかし、クマもまた生き延びるのに必死だ。特に親グマは子グマが自分で、餌をとれるまで連れ添うのだ。この結果、二頭共処分されてしまうこともある。

文明の発展で人間の生活が豊かで安全になるのは喜ばしいことだが同時にその状況に「澱」とも「影」ともつかないのものと対峙して私は心が痛む。

この年齢になると、その他、社会や人の考え方や多くの変化に対応するエネルギーも乏しくなり、時々、もはや園長川井直子は

「形骸」である、と宣言したくなる。

しかし、「エリックソン」は言っていたかな・・・？

「老い」の受容、かつての力が失ったことを嘆かず
新たな「光」を見い出そうと…。

子ども達は「光」だ。改めて国の根幹は「教育」、「文化」で
あると言いたい。

